古今
茶道全書
智
巻之四
茶會亭並方式法之事 不及小目録
同客方式法之事
飾點之次第 聚落法京紹鷗利休織部 差別各之詳于茲
同二疊之大目より臺子之大目并爐前風爐
臺子及發茶板臺古前乃事
古田氏三疊大目傳受之圖
464

797
.K6

1045

茶湯小鏡

茶會亭主方

一茶の湯といてさんじ思ふ時ハ兼日より應分家内路
地庭をよく掃事させいろいろ合叔献立并附合
味して客組三四人或ハ五人とも内々案内日限を極
め菓子ふくも時節によりて二三ふ種まへくらいに撰べし茶の味
も前日よくよく其味ひを見定め水の鑑定清濁をよく
入りてひきたる数寄者の所望也数寄ごとに茶数寄ハ
不調法にて覚悟たしかにあるべきもの也
一茶碗茶入ハ形覚ともに今時ハ少なくとも古作を用ひ
新家の茶の味何れもきこえて後湯味次第にて茶の
ことにことのほかよりよきをの心入にて浅ましきことゆへ文

て右の手にて茶續の口を指茶入をかへして茶巾にて仕組
水つぎ水にて乃茶杓上へわたし其蓋をあとのけて仕組
なおし釜の蓋をとりして茶巾を右の手へ取かへし茶の
蓋をとりて又日宥置つゝをかへしふくさをさばくして
又茶つぎかれて又茶巾と蓋置とのせ其後茶入環
をかけかえ水下へさげよせて扨ゆかゆに柄杓をかけおく
をきんて茶をかきてそれをすくに懐中してなお釜
を柄の懐中より取出して炉の縁よつて茶碗の口にて拂
返し羽箒を膝の右の座に炉縁へ客の様にらふくさと取
出して茶の蓋をとりて府は茶をけい膝の床の方にて置
とまえ茶入へ寄かけ柄にて返して茶碗の口へ入おとしとおしるなり

○右の香炉の蓋を勝手へ返つて下にきても引うち又ハ
香盆の上よりもとり其蓋を見合仕舞て右杓の中仕
廻ておくべしと云返す也
○水續ハ釜へ水をつぎて茶の蓋をとして茶をふき仕舞
水つぎ仕舞の上にて茶巾蓋置をのせて同勝手へ入
を置附に件の香炉をもかさね炭取勝手へ入返もよし
○羽箒ハ炉縁にてのし置仕廻に拂ひへつりもて置又
炭取の前にて仕わくも茶入又羽箒
を懐中ありて仕廻に小環と懐中より手の頃りに則
彼羽箒をふくさより取出して炉縁をもち拂ひ茶碗の口
まて拂仕廻に茶のふさハ梅くさして切へ家道を仕廻不

○飾　水指　茶碗（茶巾　茶杓）　茶入（袋纏り）　臺目疊　茶道口

右圍仕廻出来たらバやがて又一節切の数寄吸物出ても
吸物を喫へのみなれバ客も仕廻圍へ入ル。亭主
とうハ客の座を立て戸をさし蓋置
柄杓を持添て茶道口より亭主出て何にても出し置一ツ
二ツ中に炉前正面より出て客座をしめ炉より置二ツ三ツま
でハ目録をとりて蓋置柄杓をかけて置向掃
水こぼしハ左の方にさらへてすこしのけるよ
置て茶碗を出して勝手の中程よ炉の方へよせ置

出し次に茶入と茶碗と我のまへの方の中程よ置
右袋の緒を解て此方へのせ袋をとる
し茶入を下に置袋を袋のけの打へかけての手にて
まくよぬらさと置ふし出て茶入をぬらひ右指乃
前にて茶碗の左に茶入を置柄杓をふくさを
置かへし又出て右手にて茶杓をおぬく
ひ出て件乃茶入の上に置かへ置則ちまて茶碗を
取出し右茶入とさきへおろし下へよせぬくさし左へ置
まし水指の蓋を上より置まて乱とつけおくを
左の手へうけ右の手にて茶巾を置さし蓋の上へ
置なをすへよ左の手にて柄杓を置左の手にふくさを持

たゝよく揩て合をふくさにてよくよく柄杓の柄を気とに
けかうたゝの手に取りそのまゝさしみて是をうち置たゝの
ひさしにまてうちかへして釜のふたとつまみよせて蓋の上
ふたをかくいたしよく蓋置の上にあつく柄杓を内たるのふたをおさ
取柄杓を左へ持かへ別釜の湯を杓ひ茶碗へ入柄杓釜に
たゝの手へとり左の手にて釜の蓋をすこしのけて又
ひきよせて左へ持かへりて蓋置の上に置て
扨又茶洗と持茶碗へ入件の茶巾の下へ取茶洗茶碗
中へ入茶巾をさんさし件して茶洗すゝぎ湯を捨て又
茶巾とり茶碗へ揩を右へ茶碗をゆりまはしとな
てとりし茶巾にて茶碗をぬぐひ下に置茶巾をとゝろ

とくさたゝみなをしかけて其上に置茶杓を中の手にとり
則茶杓を右にてふきて茶入を右わけ蓋を右に置例の茶
を入茶杓は茶碗に置茶入に蓋をしてもとの所へ置茶筅
取茶をさらりて茶杓をぬぐひて茶入の上に置其
手にて柄杓をとり左へ持かへてふくさを右に取釜の
蓋をとり湯を汲で件の湯に茶をたて能くさそへ
懐中より出し右の手にて宗易ニ方へ置扨茶碗をふく
さの手にて出し置也
○客二人の時より三人の時へ茶を出す時に茶巾を釜の蓋の
上に置きて柄杓の蓋を右に柄杓を右に持かへて水をくみ
柄杓の手を左へのせて右の手にて水を釜へつぎし茶碗の湯を

うむなし
△花月お客中へ入合図見よ亭主の心もあつらへの事へ
客合統中亭主心安相好の方より何時にても入一首や
何にても先まで同じ仕つりにも中内を始めさせるを専要
合をすべし
△外路地にて内を窺ひて入一座ねりもてゆかんとを
第一に気を付座敷の感じて一やとりにていりあるを思ふ
つり亭主の挨拶客を感じ珍しき風の事を何とよく心付
らくり入亭出向ふを気を付て掛物をむさとみる事
と不礼なしけれや
△中くぐりを明亭主ら出る時出て一礼お無の前お挨拶
つまて引込まよりつくと上客すわり順くよらずつまを越
入る先掃除をして亭主へ気を付あけいらう方
跡それ戸なら亭主へ入り又出て縁側して上客よ
つまを水仕舞まよ刀掛へ懐紙を置よあがり入り候
れとく見事とよけて草履を立掛置ちり紙めてよ
を設囲へ入
△寒冬には一人宛にちてあかりのさあるとも揃の
あかり程あけ入末座の客入りくへあとともとて仕舞ふ
△先座をとりんて床間へ行かゝりと見炉中釜の気
を付さ外天井座子障子窓とをも気と付くる新
炭設からは付よみ及ぶ不あるそれての様のりよ出役

ら作付は花活花もおかくハ床座敷と付紙表け
地板なと手よりの縁へ出て中立座敷
△去る所に居て亭主茶道口と勝手の如く
手より礼義お辞儀して客をおけるへく附わる手前
炉中をみ炭の形と嚢楓をよく火様つき分く拾
中見るなり
△楓炭を仕廻なきおもとへ立るへく附香箱を下置
ある事
△香箱亭主へ出る時も上客左ハ下へかなとすへく末座
より香よハおとを色伴の者ハ見おらえ仕廻に亭
主へ出る事なり仕舞おく上座をれるへし

のるハ見る方の床ハ香箱を拝し薬箱拝して縁附かし
見合まする事亭まうらあり下へ出て座也
△亭主茶道口へ引き仕廻かへる迄通口脇附を
もって縁を指出ハ口方を座まで受取て給へ
縁より何をも同意なるへし
△食鉢ハ大鉢亭主二度と脇ね二度めの汁をよけ
縁仕廻引食に汁かはりなどて見合中酒出るへし文
亭主への挨拶に末座よりみ合せ会お湯鉢出す下座
又と上座へうつて下座も一座へ見合せ中読の
お拶まで下座もすると一向論酒二三返まて終るへし
△湯盆に湯とつぎ水つぎおそしと添上客のおへ出る附

先湯をつぎさましをふりなかつき茶碗へ通し水指まて
持よりて湯を捨つへし茶筅ハ鼻紙にて拭ひ茶の
ふちにかくるぬやうに持ち茶碗へおとしへくるへきなき
まいぬるぬぐふもの也

△茶菓子出す時へ持ち出輪鼻紙にて清め上客の
方より次へ中合をかさずにと末座より次方へとり次
をかへる時より二で湯をかけ置也

△菓子過て今一度湯懸おろし一をもとて上客の前にて
うけ持なくとも亭主出さる出で出る下に御座候
相客二度はまたかけ押入気と付次第しに一人宛退
出し末座より順に出るる時は一人宛出て置く

をなめてもよい不及

△中立して茶湯の席へ入て感じ入て是より亭主
床の掛物なと見済し挂物の仕様なんど道具と付
茶入刀掛け石燈籠水鉢蹲踞など見て是にて感じてて
ゆるゆる縁かけより体息し扨手水に向ひ亭主なと
いま先のる出くる時は心遣ひに付其ひの
あるへし扨其隣中入の音を聞くよ関へ入ことを
併其ゆめて座へ居る時は中の床へ向ひ先花を見又
臺関に廻りかけ釣りてよく見座へ有へし

△茶掛指出し併茶を亭主出し炭と云事の後て
示るまでる時九寸に炭とる合火所へ持出し併の通し

勿論宗匠たる人ハ名物ならでハ持べからず其外も
茶入は天目の外ハ名物として此茶の湯する人ハ
名物の器を見ずしてハかなハぬ事也

漢物

明星　肩衝　水滴　弦付　西施　餌籠　樽　鶴首　角木　丸棗

大霍　小霍　文輪　常陸帯　挙蓙　笹耳　弦耳　但小霍ト云

茶入ハ百年以前ヨリ時雨ト云

和物

飛鳥川　根抜　丸棗　藤四郎　脱磨　大海　手縮　姉手　黄

薬生　海鼠　手春　慶尻　膨　金花山　橋姫　玉川　玉楢

天目　手伊勢　手落穂　小河　御堂　柳　手野田　遠山　青江

但金花山の事茶入慶長以後唐物を兼たる茶入内海肩衝丸胴縮
銅占呂丁車瓶撫口茶入ハ茄子尻ぶくら銅蓋山駿蓮　唐物と云
油燈但唐物擂茶古瀬戸之数円座桶尻其外名物茶入
も中古の物ぬるしもの也ひさし大きなる名物ハ和
物も古の数ハよろしき物も有之南京渋付落茶
入織ア渋付同

付り書

河去時代お後紹鴎時代之蒔絵書る利休時代よ見
あり又ハ唐来ふて和来地内黒塗の書あり丸書も
紹鴎時代なりる大平継小中継織ア形利休形なし
あり茶杓も又書小ハ節なし長茶杓など有

當世ノ炉遠州利休寸法ト可知
紹鴎已來ノ大槩ノ寸法也
聚楽法印マテ大釜ヲ用ル
是モ湯ノ吟味歟也

ゑ盆袱を取出し畳てく建水ゟ居後所して付
置乳袋して茶入と取出し袋ぬかせ帛紗さばきして
茶入ゆひ蓋ふ拭り拭くさ
はしまき茶杓をゆひ茶入
ふかけ茶釜乳蓋
取扱ありめて茶
碗乳出したまて之入
より柄へ左右て本
の緒ひあまりへいきき拭ふく茶筅よそふして置く
あけ茶碗取出し下よ建水袋ちうへ乳結を前の前へ
まて入棚の奥中よ上建水蓋置と取出し帛紗あて釜

の蓋をとりて湯二柄杓入釜の蓋
しめ柄杓蓋置に沿茶釜乳蓋
湯次しまして
めて建茶巾を
ほり穂めて左の
てく茶振の上へ
あけ其の茶筅
湯次二為あけほ（てくしにつかうて）
こりみをあけ気
と付中差入申し
茶巾取茶碗了

上湯を捨拭て小釜茶巾にてふくみのこしてある茶
杓茶筅を置茶入の蓋を取茶をへり點て又茶杓茶
碗よりけ茶入へ出し産へ出して茶を廣げ其のことく茶杓
うけ柄杓を釜の蓋を取湯を汲ておへ下に釜茶釜の
如くのもとの如くまして帛を以てぬ出して茶碗出して出る
やくとを釜の蓋をも柄杓ハ
棚上蓋を釜を上
釜据よせ客へ向
居帛服うしろふさ
釜をを出し釜の
蓋を取茶巾を

蓋のとへ上置其の蓋を取り水一柄杓くみ釜へ
さし柄杓下に釜にて茶碗飯をすゝきてさて
ゆすぎよ釜の蓋あり柄杓を湯一ツ入茶碗をすゝき又湯て
一柄杓入時宜より柄杓を云まおさ入不調法仕候
こゝと云宜まて云付左指すへとも又湯と二ツ
入茶釜湯汲して
引上湯とすて茶巾
みて飯をさるよ釜
茶巾をとうりの
しく拭の客の蓋
ほとへ上る柄杓を取

あり板袋茶碗の時ハ此式

一此ハ茶莚つき式
前のごとく點法ハ
右の作法おなじ
かざりやうハたゞの勝手よりも此ハ茶ありてかり
よりたゞの勝手にて並あり

炉臺子莚臺之図なる

一此ハ茶莚りかくのごとし茶入と二具組にするなり
ありて勝手次第にするなり帛たゝみ出し茶入かざる

ませ蓋之間ともにまて
杓かしたにて水盛下し
茶巾りときハ
して客之内を
禮あひて蓋
之図ニ出せり
茶入袋繩紀して之井へ上帛にてさしてさし茶入ニ上巾ひ
前のごとく莚り茶碗巾ひらけ並茶筌ニ出し莚り脱
巾にて之井と巾ハ帛繰みんさゝ茶巾ニ足つよりて
あると常のかくさめ茶巾あひて之井へおけ蓋とあ
なりて引茶蓋並之帛ニおゐし登の蓋ニて柄杓

蓋置へ置いてよりかへ茶巾の蓋して柄杓を柄杓をきよ
さし蓋置柄杓へよろ時も茶入らぬは常のごとくぬぐひ
出して茶わん常よりからう事なし此外手法ぐ事も
よきさへぬれぐ茶わんれるさよまさ取つり式方ハ此事ゐ
ぬぐふよとくんはあるへしいつまで水茶碗も此式方ぬ根
本也　上点大臺天目大勝手の事
一此台天目の飾りかく此上
点様ハ茶を常に依ても通
るり本勝手に依も此かたを
ありてものハ上点大のんを
以点るあり

一点て出炉臺天目の事
一此は常臺天目に点様
茶の上茶のてうしきものハ
一点ては此かくのことし臺之
大勝手の向炉本勝手の
出炉きよあり
插樓棚右勝手臺天目
一本勝手の通も此のあり
一此は茶茶ても此かくのことし
この通にて右勝れてく置
蓋をすこしたく茶わんの

一此四畳半座敷とハ二畳半ハ古首の座敷にて圍にするゆ
ますさ縁路の内ち周すうろ四畳半を此の上り座敷にして
中の半畳を小縁路にして炉を壱尺四寸に切て炉縁ハ角
なし内丸くあり向亭まてをも撰ひてもかけるうなり尤
好よ撰のうちに是有色れるともいふ是後利休の時よ
至て炉縁壱尺四寸ニして去服口壱寸為四方に切し
内五寸六分四方にかゝる也炉縁乃畏よそ炉中の
灰を尤さ心あして角を切るなり此方よ炉のと三寸ある
而今かゝひ入四畳半座敷にても十畳の座敷までも四畳半切
の座敷と云又ハ自在なる撰のゝ事なる四畳の故え
なるよなるへし炉の上三尺の天井ハつりてもかけし炉一

此座敷ハ桃山を移りよらし畳の敷様ハ以られた勝
に逆られハ大に勝に也

四畳半台子勝手の茶事の気合

一まヘひ茶の向ハ台指を勝の右てよ指出下よ釜我も
下よ置て台子の緑をみ左る也茶入茶碗指出中
勝手よ置て茶入を釜右の手をそろへて茶碗を左に左
柄下よ置く台く右の手ほうりて茶碗より扱くと
出て水指中を茶入茶碗にて蓋割茶入をそろへよ置之
柄を扱りて畳の内へ蓋置釜柄扨入指出して同の内へ
入ゐてのすゝめて畳湯のさしく釜出し茶碗くとんそ

炉ヨリ上三尺ノ真中
ミツメ
炉通ノ上ニ置
大蓋置真中ノ時ハ

釜元の帛巾をたゝみて元
水指の蓋の上を二拂ひ
又たゝへ渡したる
取りて茶巾を元
の指の上にかけ
又たゝみて置き
元の帛巾をもとへ入の
蓋拭き元蓋をし
まけ帛巾懐を
右をもちて
茶碗の向に元

引出し置の下に釜湯二柄汲みてたらへ柄杓渡し膝に
釜たちて帛巾と取合の蓋をしめ帛巾を懐にいれて柄
杓をへ元蓋置にかけそれにて茶筅を茶碗に入湯を
三つして下に釜水指の上に茶巾をとほりちうめく
あてめ又水指の上にあけをきて茶筅湯に二つして
引上茶合のかたかまとりて
取に釜とちにて茶巾元
茶碗に添えたに
て引上茶巾合
膝に釜元まて湯
ときそ中へ上至

みして蓋を取むうこを肘上座か茶入をとりて肘匠あり手前
らえて先茶たてのうちをあら有てひや蓋置たた
めて水差を持ちてつりし給とらめて茶杓茶入を帯し
袱巾を出し置て押出し茶入の蓋を取て置ひさふ
きこを從ての膝の上に置取出し胴と巾ハ蓋をせ成
て袱巾懐へ入居の所より出し茶碗にひ肘向匠茶
碗を入るゝ又出水指をとり置のうへより置袋と茶入
板懐より出紙を取て指の縁炉縁蓋置のしたの置
時下巾ひきの小茶方へ向ひてうへ茶水さしとれ置の板
然肘茶を出茶入ちうてれを肘前取をらゝ其方茶入を
肘の茶尾よりいろくの掛りの置とれ礼を以茶入

湯盃之置合

一 湯つぎ

一 こぼしつぎ

但し角盆置候もよし太子孫三郎霊を香ニも

三畳大の間古田織部宗匠之住居

一大目数寄座席此数寄の書院と違床脇の違

棚のかわ板を付るゆへの床つまで張付して一畳ま

目入七寸三歩の畳を加付置候大目にて炉を切茶

点の織部宗匠置とせましき所縁にて二畳をかり

同じく七寸三分の大目畳に対合して二畳大目にも
是古田氏の作也
一 夢戯園の時節に喜翁の相伴衆一和のる計寄合
時茶会を催し主客刻戦を脱し囲へ入家来を携参披
来りし事終て同畳に半ばかりせめりくる住居縁へと同畳に
よ外に大目を対してつくるもあり
一 茶屋の住居は色せ武の大目を対して入ともあり又脇に大目
あする住居もあり也住居は囲のいと対す堂先の住
居まもしすへし
一 茶やハたけるハりし寺門非茶武八里におかれより
亦よ為し庭中に形まるなし非堂辻堂の類なに何とえ

もくよ呼継はけ給ふべしあかけハ西風と嵐といへひ
軒(のき)ひさく枝さ遠く句編俤(おもかげ)と把数寄者惣(そうとう)人者数れ
知しるべし

茶道全書四之終

床の内下地窓則体地敷居より
鴨居迄九寸五分上下有長壹尺二寸
西方幅壹尺四寸西方